

この一年を振り返って

中西 卓

ヨタヘ口の日常だが大過なく終えようとするこの1年を振り返る。去年はJIANTで転倒して左親指を6針縫う傷を負い、おと年は山麓で水を貯める堰に背中をぶつけて救急車のお世話になる（幸い骨折はなかったが）不始末があったが、その後は歳相応に自重して行動しているからか・・・。

「林住期をどう生きるか」と年賀状に書いたのはいつだったか、その後もぼやっと生きてきたが、この1年も終活が一向に進まず 偶々見つけたものに追憶の時間を費やすのが再々である。

米寿と言われて 同輩の諸兄姉は嬉しいだろうか。小生は全くそうでないが、腹も立たないので黙って受けている。介護サービスを受けることなく健康で自分なりに生きがいを感じながら暮らしていけるのは有難いが、明日はわからぬ我が身である。

さて、与えられたテーマに従って振り返ってみるが 個人体験の断片で普遍性がないのは老翁の戯言とご了解の上でお目通しいただければ幸いである。

歎異抄と布教師： この団地に新築した親鸞会館に二月ほど通うことになった。新聞一面の広告で 高森顕徹著「歎異抄をひらく」が頻繁に出た頃で、オンラインのスクリーンに高森氏が黒装束で現れる講座であったが 居眠りもした。休憩のあとパリッとした紳士風情の布

教師が登壇し「荒海に投げ出されて藁をも掴む皆さんのところに大きな船が現れて・・・」
とホワイトボードに絵を描きながら、歎異抄の一節を説く。門徒ならば読むべきものを読んでなかったのがこの機会に勉強できると思ったが、2週間後に全く同じ話が、その2週間後にもと続いたので、周りの何人かに聞いてみたら「有難いお話じゃないか」と言わんばかり、残りが少ない自分は付合い切れないと布教師あてに丁重な手紙を届けたが応答なく、それ切りになった。

30余年前に3年余り南御堂で真宗講座を受講したことがある。大谷大学の寺川俊照学長は教行信証を そこそこにキリストからイスラムまで幅広く宗教を説かれて、月一回通う喜びがあった。

三浦綾子の小説： 環境活動の縁で牧師未亡人から借りた「塩狩峠」を読んで感動したので、図書館にあった「氷点・続氷点」と「母」を続けて読んだ。更に小林多喜二の「蟹工船」も読みたいと思っているが、遅まきながらキリスト教とプロレタリア文学に触れようとしている。この世界に無知だったのを恥じるのと、まだまだ知らんことが一杯あることを思い知った。

認知症その後： 二月前 親しい仲間の工博から凸凹に歪んだ文字のはがきが届いた。（夫人の添書きで事の次第がわかったが） 県エッセイストクラブ誌で彼の小品を読む楽しみがあったのに、こんなことになるとは。拙稿「認知の余話」に加えるにはまだ早い、おそ

らく戻ることはないだろう。Dr.長谷川和夫よりずっと早く 2003 年世に出た Dr.小澤勲著「智呆を生きるということ」（岩波新書）を読み始めている。

初めてお茶会に：夫君を失くされて遠ざかっていたが、上記の経緯から牧師未亡人が主宰のお茶会に招かれて今日午後女性 2 人・男 3 人のところに仲間入りしてきた。言うまでもなく皆さん教徒で 門外漢の自分は何を話せばよいのか気がかりだったが、優しい顔と気さくな話に 2 時間半楽しませてもらった。70 代の方達が話す受洗の経緯もありふれたことで頷くばかり。新入りが厚かましく地元の活動を話したら、居住年数が長い様々なことに耳を傾けてもらって嬉しく思った。初めて牧師家族の住まい*を訪ねたが、2 階の談話室の外は落葉樹の自然林で、お茶会に素晴らしい場だった。（*7 年前に亡くなられた牧師は北海道の旭川から始まって数か所を経て岡山に。ここは住居だけで、晩年は神戸大学をベースに活動されていた。）

一年が終わろうとしているときに、基督教の門外に立てた幸せに感謝している。

(おわり)